The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『悔過会と芸能』
Author(s)	佐藤, 道子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44733
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【40】

氏　　名	佐藤道子（さとう みちこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　18025　号
学位授与年月日	平成15年5月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**『悔過会と芸能』**
論文審査委員	（主査） 教　授　天野　文雄 （副査） 教　授　中村　生雄　　教　授　平　　雅行　　助教授　永田　　靖 大阪大学客員教授　山口　　修

論文内容の要旨

本論文は、7世紀後半頃から8世紀後半における式法の確立以来、今日まで法相・天台・真言等の仏教寺院において主として年頭の祈年（としごい）の行事として勤修されてきた悔過会（修正会と修二会がその代表的な法会）の展開の様相を、その呪術的側面や芸能的側面にも留意しつつ、総合的に解明しようとしたものである。全体は、悔過会の性格や形式など基本的な問題を概観した序論と、悔過会そのものの形成と展開を論じた第1部（4編の論考からなる）と、現在勤修されている悔過会中で最も古格を保ち、かつ最も多様性に富む東大寺二月堂修二会をめぐる諸問題を論じた第2部（8編の論考からなる）で構成される、400字詰原稿用紙に換算して1500枚あまりの論文である。なお、本論文はすでに平成14年5月に法蔵館から同題にてA5判622頁の単行本として刊行されている。

悔過会そのものの形成と展開を論じた第1部は、「呪術から芸能へ－能・狂言の母体」「悔過法要の形式－成立と展開」「悔過会　中世への変容」「「唱礼」について」の4編の論考で構成されている。すなわち、「呪術から芸能へ－能・狂言の母胎」では、東大寺や薬師寺や国東半島の天台諸寺院の悔過会における「呪師作法」をもとに、その芸能的要素がしだいに顕在化してゆく過程を跡づけて、それを能・狂言成立の母胎的なるものと位置づけ、「悔過法要の形式－成立と展開」では、奈良時代の文献に所見がある吉祥天・薬師如来・十一面観音・千手観音・阿弥陀如来を本尊とする五種の悔過会について、悔過会という法会そのものが唐智昇撰『集諸経礼懺儀』に依拠していること、五種の尊別の悔過会それぞれの依拠経典や目的が声明の詞章の比較によって特定できること、懺悔重視から出発した悔過会が祈願重視へと展開したことなど、悔過会の成立と展開について論じている。また、「悔過会　中世への変容」では、伝存する悔過会の構成のうち南都寺院に集中している六時勤行型と南都以外にも京都や東北地方など広い地域に存在する二時勤行型に着目し、悔過会が平安時代初期から勤修されるようになった仏名会の影響をもうけて六時型から二時型へと転換したこと、それは悔過会の懺悔重視から祈願重視への変化であり、苦行牲中心から荘厳性中心への変化であり、さらに娯楽性・芸能性の顕在化という変化であることなどを論じている。また、「『唱礼』について」は、悔過会の中核に位置する「称名悔過」成立の基盤を解明すべく、天台宗・真言宗・曹洞宗などの法会で用いられる声明たる唱礼の性格を検討した論で、唱礼は悔過会の「称名悔過」とは系譜を異にするものの、古来僧尼の自行作法であった唱礼が利他典礼に転換したところに「称名悔過」が成立したとしている。

また、悔過会中で最も古格を保つと考えられる東大寺二月堂の修二会をめぐる諸問題を論じた第2部は、「悔過会と二月堂の修二会」「二月堂［悔過作法］の変容」「東大寺修二会の伝承基盤－伝統芸能の保存組織のあり方の研究」

「神名帳－その性格と構成」「小観音のまつり」「達陀の道」「悔過会と牛王宝印」「二月堂修二会の声明」の８編の論考で構成されている。すなわち、「悔過会と二月堂の修二会」では、伝存する諸悔過会における東大寺二月堂修二会の位置を論じて二月堂修二会は懺悔色が強いことを指摘し、「二月堂［悔過作法］の変容」では、二月堂修二会の中核である「悔過作法」の勤修形式の変化の実相とその変化の節目が江戸時代中期にあったことを指摘している。また、「東大寺修二会の伝承基盤－伝統芸能の保存組織のあり方の研究」では、二月堂修二会に参籠する練行衆によって平安時代から書き継がれてきた『練行衆日記』をもとに平安時代から幕末までの700年間の法会運営の実態と変化を論じて、二月堂修二会が1200年以上もの年月を営々として勤修されてきた原動力は僧団組織の「行法不退」の決意と自負にあったと結論している。また、「神名帳－その性格と構成」は、東大寺二月堂修二会など悔過会における神名帳奉読という儀式の来歴を検討したもので、悔過会における神名帳奉読はもとは官用の祭祀台帳であった神名帳がしだいにその性格を変えて法会の場に諸神を勧請するために用いられるようになって悔過会に導入されたものとしている。また、「小観音のまつり」は、二月堂修二会の本尊である大観音と小観音のうち、法会の節目ごとに丁重な扱いを受けている小観音に着目し、小観音にかかわる法会次第の歴史的変遷を検討して、二月堂修二会の原初形態を考えようとしたものである。その結果、二月堂修二会の小観音がもとは堂外にあったもので、修二会の期間中にのみ二月堂に奉迎されたとする近年の新説を補強しつつ、二月堂修二会の法会としての原初の形態を堂外からの本尊奉迎に重きをおいたものと想定している。また、「達陀の道」「悔過会と牛王宝印」は、二月堂修二会の付帯行事である「達陀」と「牛王宝印」の来歴を考えようとしたものであるが、このうち「達陀」については、インドやイランに発する火の信仰と行法を根源とし、それが雑密経典の経説に影響された呪法がわが国に渡来して民間習俗とも習合した結果であろうとし、「牛王宝印」については、二月堂修二会の悔過作法の依拠経典である『十一面神呪心経』の影響のあることを指摘し、「牛王宝印」の諸悔過会への定着には二月堂修二会のそれが源となった可能性をも指摘している。また、最後におかれた「二月堂修二会の声明」では、二月堂修二会の「悔過作法」に用いられる声明の唱句や旋律やリズムの多様化を、「悔過作法」の形式の変遷と関係させて論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文が対象としている修正会・修二会に代表される悔過会は、本論文によれば、現存するものは51例で、行事そのものは絶えてしまったが、悔過法要の次第本が残るものは42例に及ぶという。これらはいずれも古代に成立した法相・天台・真言の諸宗派に伝承されており、浄土宗や禅宗など中世以降に成立した宗派には存在していない。従って、本論文が対象とする悔過会は古代に成立し定着をみた仏教寺院の法会ということになるが、現在も行われている悔過会だけでも51例もあり、そのなかには「お水取り」の名で知られている東大寺二月堂修二会も含まれている。また、今日、全国的な規模で存在する「おこない」と呼ばれる年頭の民俗的行事もじつは悔過会が民俗化したものであって、悔過会は芸能・民俗・宗教などを包摂したわが国の基層的な文化を考えるうえで、きわめて重要な事例を提供しているといえよう。本論文は、その悔過会について法会構成の分析という視点に立脚してなされた実証的で総合的な研究である。

本論文の著者は、すでに、本論文の第２部で検討の対象としている東大寺二月堂修二会について、現在の行事の構成や次第、参籠衆諸役の作法や声明などの詳細な調査記録である『東大寺修二会の構成と所作』（平凡社。全４巻。昭和50年～昭和57年）を刊行している。東大寺二月堂修二会の構成についてのこのような詳細な記録はかつてなかったものであり、これによって法会構成の分析をふまえた本格的な法会研究が始まったことを学界に強く印象づけた。本論文はそのような業績をもつ研究者による悔過会の総合的な研究であり、第２部の東大寺二月堂修二会についての論はもとより、悔過会全体を論じた第１部の議論考にも、『東大寺修二会の構成と所作』に結実している著者が開拓した法会構成の緻密な分析をふまえた実証的な方法が貫流していて、悔過会というわが国の文化の基層をなす法会の全体像を現時点で可能なかぎり把握することに成功している、と思料される。そのことはたとえば、第１部の論考「悔過法要の形式－成立と展開」などに顕著で、そこでは悔過会46事例について、悔過会全体の中心部をなす「称名悔過」と「諸願」という２つの儀式の詞章が62頁にわたって一覧表の形で整理されている。このような整理の背後に

は著者による長年にわたる膨大な実地調査や文献調査があるわけであるが、このような膨大な調査を凝縮させて導きだされる結論や推論はまことに強い説得力をもっており、その結果、そこに悔過会そのものの成立と展開の解明という困難な課題がみごとに果たされているわけである。

また、本論文は以上のような悔過会を対象にした法会研究であるとともに、その題目にも示されているように、悔過会の芸能的な側面についての研究でもある。もっとも、本論文中で直接その芸能的側面を問題にしているのは、第１部の「呪術から芸能へ－能・狂言の母胎」と、第２部の「達陀の道」くらいであるが、法会と芸能の密接な関係はたとえば芸能研究の常識であり、その意味において、悔過会という法会の成立と展開を論じた本書はその全体が芸能研究と深くかかわるものと言うことができよう。とりわけ、悔過会の「呪師作法」のなかの行法に能・狂言の母胎をみようとした「呪術から芸能へ－能・狂言の母胎」は、能楽研究においても示唆するところの多い貴重な論考という評価が定着している。以上をもって、本研究科は本論文を博士（文学）にふさわしいものと認定する。